大人のための 100 選

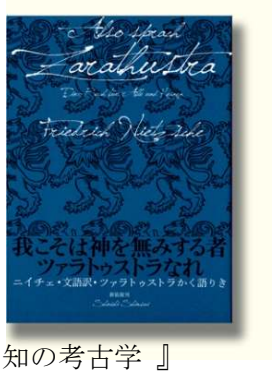
1　『 精神現象学 』

G.W.F.ヘーゲル　長谷川宏訳　作品社

近代哲学の始まりを示す書物。‘弁証法’という言葉はここから始まった。本書の訳者でもある島根県旧平田市出身の哲学者長谷川宏氏は、柔軟な翻訳によって日本近代哲学史の中に固着していたヘーゲル像を一掃し、全く新たなヘーゲル像を立ち上げた。同郷の夫人は、児童文学者の長谷川摂子氏。摂子氏は米子市立図書館で講演をしていただいたことがある。

2　『 ツァラトゥストラかく語りき』

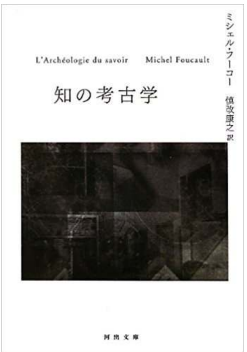
フリードリヒ・ニーチェ　生田長江訳　書肆心水（しょししんすい）



信じ難いことだが、わが国では明治 34 年に最初のニーチェブームが起こっている。日野町根雨出身の思想家・生田長江は、生涯をかけてニーチェの翻訳に打ち込んだ。大正期(新潮社)と昭和期(日本評論社)の二度に渡り、個人全訳を行った。その翻訳文体は、詩人・萩原朔太郎などに甚大な影響を与えた。書肆心水（しょししんすい）版は長江文語訳の復刻である。

3　『 知の考古学 』

ミシェル・フーコー　慎改 康之（しんかい やすゆき）訳　河出文庫



“フーコーの登場によって、サルトルが過去の人となった”と言われたのは、すでに半世紀も前のことだ。21 世紀から振り返れば、後世に最も影響を与えた 20 世紀の思想家として、最初に指折られるのはマルクスでもフロイドでもなく、このM・フーコーだろう。『狂気の歴史』『言葉と物』に続く本書によって、フーコーは自らの方法論を明確にしたといえよう。

4　『 野生の思考 』

クロード・レヴィ＝ストロース　大橋保夫訳　みすず書房

構造主義の四天王といわれた文化人類学者。言語学の理論を方法論として大胆に取り込むことにより、文化人類学という枠そのものを越える大きな影響力を獲得した。大伽藍（だいがらん）に守られた王権も、未開の地の王権も差異はないとし、未開民族の思考を野蛮とする西洋近代の自文化中心主義を厳しく批判した。本書はレヴィ=ストロースの代表作となった。

5　『 物と心 』

大森荘蔵　　東京大学出版会

日本の哲学界の中でも、例外的に多くの読者をもつ哲学者。バートランド・ラッセル、ウィトゲンシュタインという分析哲学の系譜に連なる。物と心の二元論を否定し、全体としての“立ち現われ”一元論を主張。“立ち現われ教”などと揶揄(やゆ)されながら、多くの読者に支持された。物とその表象、存在と意識など“二元論の仮構を取りこわす”という著者の企図に、哲学の醍醐味を感じさせられる。

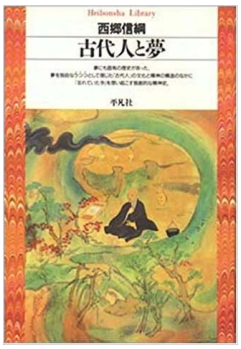
6　『 超越のことば 』

井筒俊彦　　岩波書店

本書のサブタイトルは“イスラーム・ユダヤ哲学における神と人”。日本人から最も遠い一神教の世界も井筒氏の手によれば難解ながらも明確な輪郭を持って描かれる。神のみ言葉を預かり、言葉が啓示となって信仰が生まれる。宗教の始まりを文化の歴史から読み解く試み。該博(がいはく)な知識の蓄積よりも、井筒氏の文章の持つ、強い論理構造に胸打たれる。

7　『 古代人と夢 』

西郷信綱　　平凡社ライブラリー



著者は日本古典文学の碩学(せきがく)でありながら、分野の異なる後輩学者たちからも広く支持された。こんな国文学者もめずらしいかもしれない。古代において夢とは“人間が神々と交わる回路であり”また“神や仏という他者が人間に見させるもの”であったという。第四章「黄泉(よみ)の国と根の国」の出雲風土記「黄泉比良坂(よもつひらさか)」の考察など、西郷氏の独創的な方法論が良くわかる章となっている。

8　『 異形の王権 』

網野善彦　　平凡社

一人の学究(がっきゅう)の業績が、帰属する学会と隣接する類縁の学問にこれだけ大きな影響を与えた例は、日本では他にあまり例がないのではなかろうか。網野氏は中世史の叙述方法を大きく書き換え、民俗学にも少なくない影響を与えた。聖と賤のはざまに生まれる“異形”のものに注目することで、かつて語られたことがないような十四世紀像を描き出した。とても学問的論考とは思えないような面白さ。

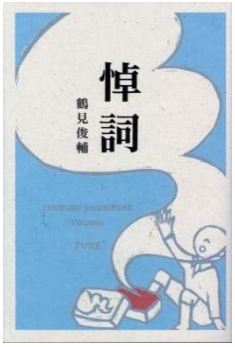
9　『 山口昌男著作集 1〈知〉 』

山口昌男　　筑摩書房　1 巻

山口昌男氏の仕事は、前期の文化人類学的な考察を基とした理論的著作と、『敗者の精神史』以降の日本近代の精神史に関わる著作の二期に分けることができる。この全 5 巻の著作集は前期の理論的な著作を、今福龍太氏が再編集したもの。どの巻も捨てがたいが、『本の神話学』を収載した 1 巻はとりわけ面白い。書物を‘たんなる資料情報の蓄積体’ではないものとして捉(とら)える論考は実にスリリングだ。

10　『 悼詞(とうし) 』

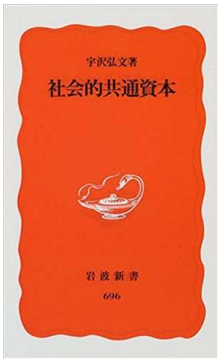
鶴見俊輔　　編集グループ SURE



ベトナム戦争の時代、反戦運動の‘ベ平連’活動家として活躍した哲学者。「思想の科学」を創刊し、自らの言論の場所を確保することにも腐心した。とてつもなく間口の広いこの哲学者の特徴が集約された感のあるのが本書。123 人の友人知人たちに向けて書かれた弔辞(ちょうじ)を集めたもの。著者の時代への関わり方がじつに良くわかる。米子出身で「思想の科学」同人だった半沢弘氏への貴重な悼詞(とうし)もある。

11　『 社会的共通資本 』

宇沢弘文　　岩波新書



米子市出身の経済学者。数理経済を専門とする研究者が、長期に、また多岐にわたり、社会的ビジョンを提言し続けた例は他にないだろう。自然環境や教育・医療などは、本来利潤追求の対象になるものではなく、すべての市民にとっての“社会的共通資本”であるとする主張は、大きな反響をよんだ。宇沢氏の死後、米子にも「よなご宇沢会」が結成され、顕彰活動を続けている。

12　『 藤田省三セレクション 』

藤田省三　　平凡社ライブラリー

丸山眞男の跡を継ぐ政治思想家。哲学者の鶴見俊輔たちと行った『共同研究　転向』では大きな役割を果たしたという。 歴史の叙述から、独自の精神史へと、常に自らの方法論を深めるように思考を重ねた。立ち止まり、考える。この繰り返しの中で、通史から零(こぼ)れ落ちた時代の精神を掴(つか)もうとした。『藤田省三著作集』みすず書房 の代表作を本書で読むことができる。

13　『 ペドロ・パラモ 』

ファン・ルルフォ　杉山晃訳　岩波文庫

ファン・ルルフォはメキシコ人作家。1960 年代から 80 年代にかけて、世界中でラテンアメリカ文学の大流行があった。「ブーム」といえば、それはラテンアメリカ文学を指すものだったほど。日本はこの流行に随分後れを取ってしまったが、日本における「ブーム」の先駆けになったのが本書。過去と現在、生と死の混在する説話。前衛的な手法が、まるで民話のように語られる。

14　『 百年の孤独 』

ガルシア＝マルケス　鼓直（つづみただし）訳　新潮社

ラテンアメリカ文学の最大にして最強の牽引者が、コロムビアの作家 G･ガルシア＝マルケスである。「魔術的リアリズム」という言葉は、この人の作品に付せられた言葉だ。希望と絶望、虚構とリアリズム。マコンドという幻の町を舞台に、無数の挿話（そうわ）が錯綜する。つねに過剰で饒舌（じょうぜつ）な語り、それ自体がマルケス小説の最大の魅力だ。1982 年、ノーベル賞を受賞した。

15　『 アレフ 』

ホルヘ・ルイス・ボルヘス　鼓直（つづみただし）訳　岩波文庫

ラテンアメリカ文学において、マルケスの対極に位置するのがアルゼンチンの作家ボルヘスである。研ぎ澄まされた静寂の世界に、該博（がいはく）な知識から生み出される奇抜なプロットが展開する。ブエノスアイレス市立図書館司書や、アルゼンチン国立図書館長を務めたことも。50 年代末に失明したが、晩年は教え子にあたる日系のマリア・コダマが口述筆記によって彼の活動を支えた。

16　『 カスティリオーネの庭 』

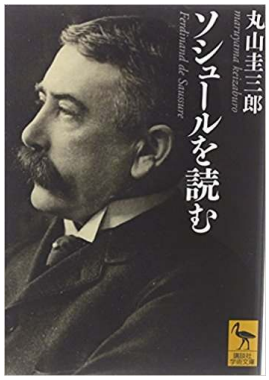
中野美代子　　講談社文庫

作者の中野美代子氏は、『西遊記』の翻訳・研究でも著名な中国文学者。創作においても『契丹（きったん）伝奇集』『ゼノンの時計』など、佳作が多いことで知られる。本書は、清朝・乾隆（けんりゅうてい）帝時代、宮廷画家として仕えたイタリア人宣教師ジュゼッペ・カスティリオーネを題材とした小説。中国名・郎世寧（ろうせいねい）の描いた絵は、見る者を魅了する不思議な力を持つ。

米子市立図書館は『郎世寧全集（ろうせいねいぜんしゅう）』上下巻を所蔵している。

17　『 ソシュールを読む 』

丸山圭三郎　　講談社学術文庫



20 世紀末の思想家たちが、言語理論を援用(えんよう)して自らの理論を構築したことは周知のこと。その糸を手繰(たぐ)れば、すべての思想家の源流にソシュールというスイス人言語哲学者がいることがわかる。わが国がソシュール理解において他国に先駆けていたのは、丸山圭三郎の存在があったからである。『ソシュールの思想』(岩波書店 1981)は、異例のベストセラーとなった。本書は『ソシュールの思想』普及版といったところ。

18　『 意味という病 』

柄谷行人(からたにこうじん)　　講談社文芸文庫

柄谷行人の肩書は何だろう。単に評論家というだけではこの人物をとらえきれない。過去に系譜をたどることのできない独立した思想家というべきだろうか。本書はマクベス論を装いながら、マクベス論を成立させているパラダイムそのものを批評的に検討しようとする。柄谷のメタ批評の典型を示す作品でもある。戦後的言説を相対化し得る数少ない現代思想家の一人だ。

19　『 枯木灘 』

中上健次　　河出文庫

もしも中上健次が柄谷行人と出会っていなかったとしたら、20 世紀末の日本文学の風景はもっと違う、退屈な風景になっていたのかもしれない。戦後生まれの最初の芥川賞作家と騒がれたのも、40 年も昔のことになってしまった。中上の作品を特徴づける「路地の物語」の圧倒的な語りの力は、日本の文学史そのものを変容させてしまった。巻末の柄谷行人の解説は、この作品の来歴を正確に伝えている。

20　『 新訳　日本奥地紀行 』

イザベラ・バード　　金坂清則訳　平凡社

イザベラ・バードは 19 世紀大英帝国の紀行作家。探検家と言ってもよいだろう。1878 年(明治 11 年) 6 月から東京、日光、新潟、北海道へ旅行。10 月からは関西方面を旅行している。本書は最初の旅行の記録で、この時代のアイヌの暮らしを写し取った唯一の記録と言われる。また、この新訳版の解題には、バードと新訳版書誌について、訳者金坂氏の懇切な解題が付されている。

21　『 塩の道 』

宮本常一　　講談社学術文庫

「あるくみるきく」は、1967 年宮本常一によって創刊された民俗学の雑誌。あるく、みる、きく、ことが民俗学者・宮本の研究方法の全てを物語っている。宮本の全国巡礼の旅の大半は、高度成長によって近世からの持続した風景風俗が消え去る直前に行われた。そこに大きな意味がある。宮本の書き残した膨大な記録は、“常民（じょうみん）”の多様性を記録したものとして、今なお新たな価値を生み出している。

22　『 キシュ／庭、灰　　カルヴィーノ／見えない都市 』

キシュ　山崎佳代子訳　カルヴィーノ　米川良夫訳　　河出書房新社

本書は池澤夏樹個人編集世界文学全集のⅡ-06 巻に当たる。池澤氏の独特の視点から編まれたアンソロジーは、どの巻も独特の光彩を放つ作品ばかりだが、この巻は特にお奨めしたい巻だ。セルビア人･キシュの作品は、ハンガリー系ユダヤ人である父の人生を会話形式で辿（たど）る実験的作品。カルヴィーノの作品は、この人ならではの伝奇小説。この二つの作品の出会いが作り出す不思議な空間が、池澤氏の狙いなのだろう。

23　『 ソラリス 』

スタニスワフ・レム　沼野充義訳　国書刊行会

レムはポーランド人作家。タルコフスキー監督の映画『惑星ソラリス』はレムの本を原作としたもの。ただし内容はかなり異なる。惑星ソラリスを探査中の宇宙ステーションで事件が起こる。事件解明のために派遣された心理学者ケルヴィンが遭遇する想像を絶する体験の記録。レムの作品は SF の形而上学（けいじじょうがく）と言われる。背景に中東欧の分厚い SF 文化史を感じさせる傑作。

24　『 V. 』

トマス・ピンチョン　小山太一訳　新潮社　上･下巻

『V.』は 1963 年、アメリカ人作家･ピンチョンにとっての最初の長編小説として発表された。文学作品に、人生の教訓とか、意義とか、そのほかもろもろの価値あるものを求める読者を、混乱させ、狼狽させるためにいろいろな仕掛けが用意されている。複数の時間軸が存在し、矛盾錯綜する挿話群。メタフィクションの眩暈（めまい）を体験したい向きには、最高の作品。

25　『 ロリータ 』

ウラジーミル・ナボコフ　若島正訳　新潮社

ナボコフは帝政ロシアに貴族の長男として生まれ、1919年ベルリンへ亡命、その後アメリカに渡った。ロリータコンプレックスとはこの作品から生まれた和製英語。少女に対する性愛を対象とした作品と言えば顰蹙(ひんしゅく)を買いそうだが、それが世界文学として評価されるのも不思議ではある。作品の大半は独特の英語で書かれた。コーネル大学で教えていた時の生徒の一人がトマス･ピンチョンである。

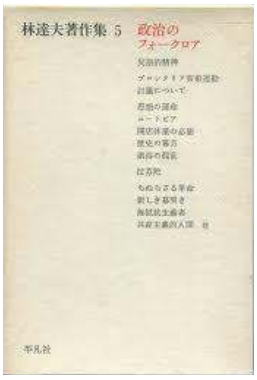
26　『 私自身 自伝』

マヤコフスキー　小笠原豊樹訳　土曜社

20 世紀初頭、ロシア・アヴァンギャルドと呼ばれた芸術運動は、真に時代を代表する先見性と革新性に満ちたすばらしい運動だった。その中心に居たのが詩人・マヤコフスキーである。この断章で構成された短い自伝のなかで、マヤコフスキーは、レフ(芸術左翼戦線)の創立など、貴重な証言を残している。土曜社のマヤコフスキー叢書(そうしょ)15 巻は、それ自体が時代の貴重な証言集といえるだろう。

27　『 林達夫著作集 』

林達夫　　平凡社



碩学(せきがく)といえば、重々しいイメージを連想させるが、西洋の精神史・文化史を専門とする林達夫氏には、“開かれた精神”特有の明るいイメージがある。著作集第 5 巻は、時々の政治状況に係わる文章を纏(まと)めたもの。1951 年に書かれた「共産主義的人間」は、世界で最も早いスターリン批判と言われる。これほど洒脱(しゃだつ)に、精神の自由を表現した思想家は他にいないのではなかろうか。

28　『 ロボット 』

カレル・チャペック　千野栄一訳　岩波文庫

チャペックはチェコの作家・劇作家。“ロボット”という言葉はこの戯曲によって世界中にひろまった。正確なタイトルは「R.U.R.　ロッスムのユニバーサルロボット」。この文庫にはプラハ国民劇場初演の際の写真や舞台装置図まで掲載されている。読み捨てられていく SF 作品が多い中で、チャペックの作品は、高い文学性によって古典として読み継がれている。

29　『 盲目と洞察 』

ポール・ド・マン　　宮﨑裕助･木内久美子訳　月曜社

アメリカの思想の多くは欧州からの輸入品と言われてきた。ところが「ニュークリティシズム」の猖獗が収まる 1970 年代頃から様子が変わる。ポスト構造主義と総括できるイェール学派の面々の活躍がはじまったのだ。この学派のいわば総帥に当たるのがド・マン。〈読む〉ことの方法論を徹底的に追求したのが本書。彼の批評は柄谷行人などにも大きな影響を与えた。

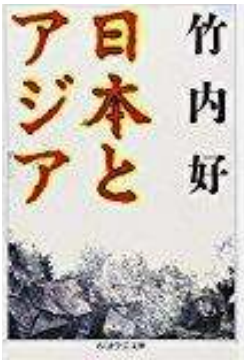
30　『 弓と竪琴　』

オクタビオ・パス　牛島信明訳　国書刊行会

パスはメキシコの詩人、思想家。第二次大戦終了後に外交官となり、ヨーロッパ各地を転々と移動しながら、生涯の代表作ともなる『弓と竪琴』『孤独の迷宮』などを執筆した。後年は各地の大学で教えた。詩的言語に関する徹底的な考察は、独特の直観的アフォリズムと明晰な論理により、多くの読者を獲得した。来日経験もあり、『奥の細道』スペイン語訳も試みている。

31　『 日本とアジア 』

竹内好　　ちくま学芸文庫



1910 年生まれの中国文学者。魯迅の研究で知られる。1977 年に亡くなったが、最近になって再評価の声が高まっている。戦後のマルクス主義的近代主義者が論壇の多数を占める中で、“ナショナリズム”や“民族”の問題を繰り返し提起したことで知られる。アジアの近代を考える上で欠くことの出来ない評論家だ。本書は 23 篇の代表的な論考を収載している。

32　『 中国小説史略 1･2 』

魯迅　中島長文訳　平凡社東洋文庫

魯迅は 1902 年から 1909 年までの 7 年間を日本で過ごした。激動する明治日本の近代化の中で、多くのことを学んでいる。魯迅の手による中国文学通史が本書。文学史という概念のなかったところに、新たな見方を打ち立てようとしたのが本書である。祖国の近代化に寄せる魯迅の熱意が伝わる。魯迅の熱意はまた、翻訳者の懇切な注にまで伝わっている。

33　『 オリエンタリズム 』

E.W.サィード　今沢紀子訳　平凡社ライブラリー　上･下巻

著者はキリスト教徒のパレスチナ人としてエルサレムに生まれた。自他共に認めるM・フーコーの後継者でありながら、生涯パレスチナ人としての出自を忘れなかった。アジア、とりわけ中東に対する誤ったイメージが、キリスト教社会の中でいかに反復・捏造されてきたかを徹底的に批判した。サィードの一連の批評によって、ポストコロニアル理論が注目され始めた。

34　『 星子が居る 』言葉なく語りかける重複障害の娘との20年

最首悟　　世織書房

著者は60年代の学生運動のカリスマの一人。最首の名を著名にしたのは、最初の著書『生あるものは皆この海に染まり』だった。水俣病の問題に取り組む中で、障がいを持って生まれた娘を通じて、生を、社会を問い直す機会を得たという。「人間の根源的な共同性」を考えようとする著者にとって、ダウン症の重複障がいを持つ四女星子は、かけがえのない同志でもある。

35　『 漫画原論 』

四方田犬彦　　ちくま学芸文庫

今でこそ漫画やアニメは日本文化として市民権を得たと言えるが、四半世紀も前に、漫画は既に「知の天蓋を覆う」存在となった、などと大仰な身振りで断言するのは四方田氏ぐらいのものだった。本書は漫画を漫画たらしめているものは何か、という根源的な問いに応えるために、漫画表現の歴史について徹底的に分析を加えたもの。鋭く、見事な批評だ。

36　『 イエスという男 』

田川建三　　三一書房

キリスト教に関係した書物は、ひどく難解か、普通の日本人の暮しからは遠いものか、どちらかだ。だがこの本は違う。日常的な暮しの中から、“信仰”が立ち上がる様子をどの本とも違う角度から描いている。あまりに激しい先行研究批判のせいで、関係学会の中で孤立を強いられたこともあったという。この著者の『書物としての新約聖書』も名著。

37　『 小泉文夫フィールドワーク 』

小泉文夫　　冬樹社

著者は民族音楽の専門家。インド留学の経験もある。深夜のＮＨＫ－FM 番組「世界の民族音楽」を聴いた世代はもう還暦以上なのかもしれない。あの放送によって世界の音楽事情を知った人も多かったはずだ。この本には懐かしいあの放送のエッセンスが凝縮している。小泉氏は、異なる文化の魅力を発見する名人でもあった。1983 年 56 歳のあまりにも早い死だった。

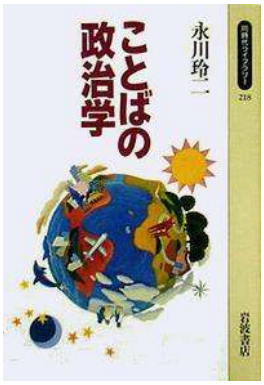
38　『詩の構造についての覚書』

入沢康夫　　思潮社

意外なことに、日本の詩人たちは俳句や短歌の作家たちと比べて、方法論に関する議論をすることが少ない。詩人・入沢康夫氏が、「詩は表現ではない」、と本書によって宣言した時、轟轟（ごうごう）たる批判が起ったことは戦後詩史にとって大きな事件だった。ネルヴァルや宮沢賢治研究でも大きな業績を残した入沢氏は、多くの文人を輩出した、日南町、入沢家の系譜に当たる。

39　『 ことばの政治学 』

永川玲二　　岩波同時代ライブラリー



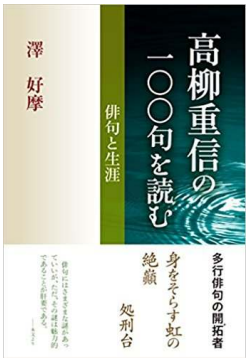
米子市出身の英文学者。終戦の年、広島の陸軍幼年学校を脱走。8 月の終戦まで逃避行を続けた。この体験は友人の小説家・丸谷才一の『笹まくら』のモデルとなった。後年都立大学の職を捨てて、ヨーロッパを放浪。スペインのセビリアで私塾を開き、一時はヒッピーの教祖のような存在だったという。本物の自由人･永川玲二による言語論エッセイが本書。

40　『 新装版 寺山修司幻想劇集 』

寺山修司　　平凡社ライブラリー

存命中から伝説の人であった。自らすすんで履歴を捏造（ねつぞう）し、都市伝説の主人公たらんとした節が見え隠れする。寺山の活動は俳句から始まったが、とりわけ彼の短歌作品には未だに新しいファンが生まれているという。本書は、寺山が 1967 年に旗揚げした劇団「天井桟敷（さじき）」の代表的戯曲を集めたもの。「レミング」「身毒丸（しんとくまる）」「奴婢訓（ぬひくん）」など、いずれも伝説的作品ばかりだ。

41　『 高柳重信の一００句を読む 』
澤好摩　　飯塚書店

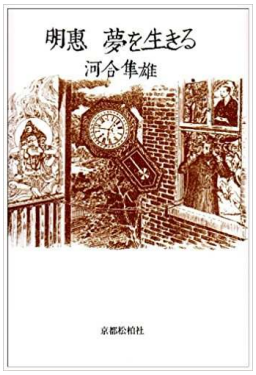


近代以降、俳句の世界ほど方法論が議論されてきた文芸ジャンルも珍しいのではなかろうか。その中でも戦後では「俳句研究」「俳句評論」を舞台にした高柳の足跡は、門外漢でも注目すべきものを感じる。議論の末にたどり着いた高柳の行わけ句は、毀誉褒貶、評価は二分したが、表現の最前線に立たんとする決意に衰えはなかった。本書は弟子の澤好摩氏の編集による代表作品集。

42　『 珠玉百歌仙 』
塚本邦雄　　講談社文芸文庫

近世以前の日本であれだけ盛んだったのに、近代以降の文芸で廃れてしまったものの一つがアンソロジーである。『国歌大観』に収載されている勅撰集などが良い例だろう。現代歌人の中で、このアンソロジー再興に執念を燃やしていたのが塚本氏だった。前衛歌人と呼ばれながら、古典に対する思い入れも人一倍だった。 本書は 12 世紀にわたる、みごとな歌のアンソロジーである。

43　『 明恵　夢を生きる 』
河合隼雄　　京都松柏社



精神分析の世界で、フロイディアンから見れば、常に批判的な扱いを受けてきたユングという存在を、日本に紹介した一番の功労者が河合氏だろう。鎌倉時代の僧侶明恵の書き残した『夢記』を、分析心理学の手法で徹底的に解析したのが本書である。この一冊で、ユングの方法についての理解、また人にとって“夢”の持つ意味が、すっかり変わったものになるだろう。

44　『 田紳有楽・空気頭 』
藤枝静男　　講談社文芸文庫

戦後文学に大きな役割を果たした「近代文学」1945-64という雑誌があった。藤枝市在住の眼科医・勝見次郎は匿名の出資者となって、この雑誌の文学賞を支えた。この眼科医が、小説家・藤枝静男であった。彼の作品を評して、現代の心境小説、と言った評論家がいたが見当はずれも甚だしい。心境小説を常に逸脱する反私小説的物語こそ、藤枝静男の魅力なのだ。

45　『 旅立ち　遠い崖 』

萩原延壽　朝日新聞出版　全 14 巻

著者は日本では珍しい、在野の歴史家。日本の近代を舞台とした、いくつもの見事な仕事を残した。本書は 1976 年から 10 年にわたって朝日新聞に連載された。内容は幕末から明治初期の、激動する日本の目撃者であった英国人外交官、アーネスト・サトウの日記解題である。著者は全 14 巻の刊行完結を見届けて、愛妻の死を追うように亡くなった。

46　『 百代の過客（かきゃく） 』

ドナルド・キーン　金関寿夫訳　新潮社　著作集 2・3 巻

アジア太平洋戦争末期、戦場で拾った軍隊日記を解読することが、キーン氏にとっての日本との出会いであったという。不幸な始まりが、奇跡のような成果を生んだ事について説明は無用だろう。本書は平安時代の円仁（えんにん）・貫之（つらゆき）の時代から芭蕉にいたるまで、八十余編におよぶ日記文学を解析したもの。日記文学のみならず、すぐれた日本文化論としても読める。キーン氏代表作の一つ。

47　『 ぼくの翻訳人生 』

工藤幸雄　　中公新書

工藤幸雄氏はポーランド文学の第一人者。1967 年から 7 年間、ワルシャワ大学に日本語教師として在籍した。『ブルーノ・シュルツ全集』の翻訳では讀賣文学賞を受賞している。こころ和むようなゆったりとしたテンポで、翻訳者になった経緯、ポーランドに魅せられてしまった自分史が語られる。『ワルシャワ猫物語』の著者・工藤久代氏は夫人である。

48 『 最も長い河に関する省察 』

池澤夏樹　　書肆山田

池澤氏の登場は、ギリシア映画監督アンゲロプロスの字幕担当者という肩書だったように記憶する。英語圏の翻訳もすでにあり、語学に堪能（たんのう）な詩人というのが若い頃の印象だった。本書は池澤氏の第二詩集。ゆったりと時間が流れる、詩人・池澤夏樹の最もすぐれた詩集だ。後の芥川賞受賞作「スティル・ライフ」の源流をここに見ることができるのかもしれない。

49　『 町でいちばんの美女 』

チャールズ・ブコウスキー　青野聰訳　新潮社

戦後の日本文学でも、例えば坂口安吾や田中英光のような無頼派と呼ばれた作家たちがいた。ブコウスキーの場合、無頼派の上にもう一つ、破滅型のということばを重ねたくなるような作家だ。作品にはアルコール中毒の、ご本人の分身たちが多数登場する。意外なことに詩作品も数多く残した。現代アメリカが生んだ偉大なるマイナー作家。

50　『〈他者〉としての朝鮮　文学的考察 』

渡邊一民　　岩波書店

著者の渡邊氏はフランス文学者・評論家として、数多くの業績を残している。本書は、1919 年、朝鮮での 3.1 独立運動から 1988 年ソウルオリンピックまでの間の 70 年間に、日本語で書かれた文学作品の中の朝鮮・韓国像を浮き彫りにせんとした意欲的な試みだ。“われわれのもっとも身近な〈他者〉”としての朝鮮・韓国を、近代日本精神史の忘れられた側面から見直そうとした労作。

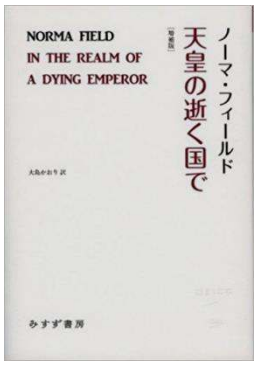
51　『 敗戦後論 』

加藤典洋　　講談社

近年これほど物議を醸(かも)した著作も珍しいのではないか。アジア太平洋戦争において、日本人犠牲者 300 万人を先ず弔(とむら)うべきか、それとも被侵略国の犠牲者を先に弔うべきか。『戦後』という、21 世紀ではほとんど死語となりかけていた言葉を、もう一度根本に立ち返って考えようとする著者。右翼からも左翼からも攻撃された著作だが、今でも重く、貴重な問いかけである。

52　『 天皇の逝(い)く国で 』

ノーマ・フィールド　大島かおり訳　みすず書房



ノーマ・フィールドはアメリカ人の日本研究者。母は日本人。1947 年の東京生まれ。彼女が一躍有名になったのは、本書が広く読まれたからである。昭和天皇の最期を東京で体験した彼女は、その時の微妙な空気を記録せんとする。沖縄、靖国、狙撃された長崎市長。具体的な記述の中に自分の家族史を折込ながら、日本人の心性に迫ろうとしたのが本書。

53　『 敗北を抱きしめて 』

ジョン・ダワー　　三浦陽一訳　岩波書店　上･下巻

ダワーは、アメリカの歴史学者。専攻は日本近代史。日本の敗戦からサンフランシスコ講和会議までの期間を描いてピューリッツアー賞を受賞した。日本人の近代史の専門家で、これだけ深く鋭く焼跡の庶民の実態に迫った研究者がいただろうか。言及の対象は日米両国政府の裏側の関係にまで及ぶ。深い洞察と資料の博捜(はくそう)に圧倒される。

54　『太平記〈よみ〉の可能性』

兵藤裕己　　講談社学術文庫

古典文学の研究書で、兵藤氏の著作のような感動を与える書物はほかに例がない。次々に繰り出される鋭い仮説と、間口の広い専門知識に裏付けされた論証。第九章「歴史という物語」では、「歴史とは収集された資料の中に確固とした客観的事実として存在するのだろうか」と歴史認識の客観性そのものを疑ってみせる。何度読み返しても新鮮な刺激を受ける著作だ。

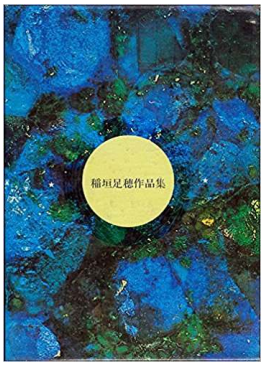
55　『「国語」という思想 』

イ・ヨンスク　　岩波書店

戦前の大日本帝国統治下の外地では、「日本語」の需要が高かった。だれでも簡単に、ニホンゴをしゃべる必要があったからだ。日本語とは何か、「国語」とは何なのか。帝国日本の内部では統治の要としての「国語」が必要とされたのだ。政界と学会の複雑に絡み合った抗争を、見事な文体で解き明かしたのが本書である。

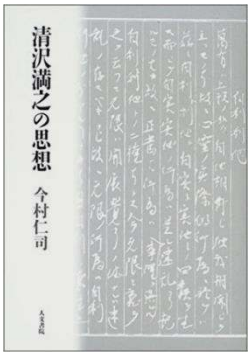
56　『 稲垣足穂作品集 』

稲垣足穂　　新潮社



稲垣足穂流星説というのをご存知だろうか。十数年を周期として姿を現わし、また何処ともなく消えていく。しかしこの周期が途切れることは決してないのだ。文学史上新感覚派として扱われることがあるが、本人にその自覚は全くなかった。「一千一秒物語」「A感覚とV感覚」など、足穂独特の発想は熱狂的なファンを生んだ。浮沈の激しい人生だったが、典型的なモダニストだった。

57　『 清沢満之の思想 』
今村仁司　　人文書院



明治という激動の時代は、現代人が考えるよりもはるかに「信仰」の時代だった。世界中から押し寄せたキリスト教のミッションに対抗するため、仏教界も改革は必須の課題だった。その先頭に立った清沢満之の思想を、フランス現代思想の専門家・今村仁司氏が読み解こうとしたのが本書。読者は、稀にみる真摯な精神の対峙を目撃することになる。

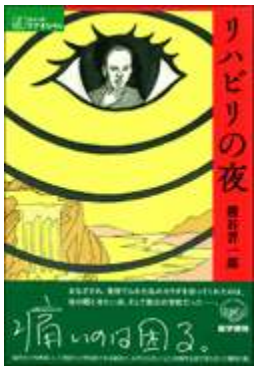
58　『 ハイファに戻って／太陽の男たち 』
ガッサン・カナファーニー　黒田寿郎訳　河出文庫

カナファーニーはパレスチナの作家。その昔、河出書房から『現代アラブ小説全集』10 巻が刊行された。今や幻の全集だが、カナファーニーは、この全集の中でも忘れがたい一人だった。パレスチナの青春と苦悩を彼ほど見事に描いた作家はいない。パレスチナ解放戦線 PFLP のメンバーだった彼は、1972 年の初夏、ベイルートの町で姪とともに車ごと爆殺された。

59　東洋文庫『デルスウ・ウザーラ』
アルセーニエフ　　長谷川四郎訳　　平凡社

2013 年に 50 周年を迎えた「東洋文庫」は平凡社を代表する叢書のひとつ。アジア全域の古典、名作、日記、紀行文などを収めている。『デルスウ・ウザーラ』は中でも最も名前の知られたテキストかもしれない。黒澤明監督の同名の映画作品は本書を原作としている。題名は、シベリア辺境調査隊のガイドを務めた原住民ゴリド族猟師の名前から取られたもの。

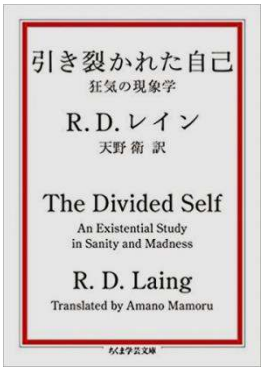
60　『 リハビリの夜 』
熊谷晋一郎　　医学書院



著者は脳性麻痺の小児科医。車椅子の医師として著名だ。「健常」な動作に近づくための苦痛でしかないリハビリ。それを諦めてしまった後にやってきたもの。介助される側の心理の赤裸々な報告があり、健常者には想像できない世界、‘文字で表すことが困難な体感’を教えてくれる。読者は、不自由と自由、この概念についての再考を求められることになるだろう。

61　『 引き裂かれた自己 』

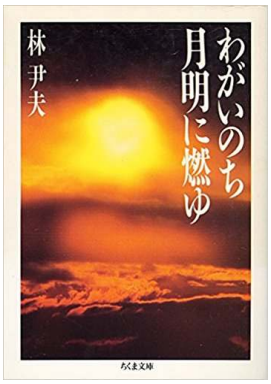
R.D.レイン　天野衛訳　ちくま学芸文庫



英国の若き精神科医ロナルド・D・レインは、統合失調症の治療において、病院に閉じ込める診療から、開放的な環境の中での治療の必要を訴えた。この、旧来の医学常識と鋭く対立する主張とその活動は、“反精神医学運動”と呼ばれ、医学界だけではなく、60 年代の若い世代に圧倒的に支持された。精神医学の本としては例外的なほど、世界中で読まれた。

62　『 わがいのち月明に燃ゆ 』

林尹夫（はやしただお）　ちくま文庫



1945 年 7 月 28 日午前 2 時 10 分。林尹夫を乗せた一式陸攻は、四国沖で哨戒（しょうかい）飛行中のアメリカ海軍夜間戦闘機に撃墜された。この一式陸攻が発見した大艦隊から飛び立った艦載機の編隊により、5 時間後、大山口列車空襲が実行された。林尹夫は、撃墜死をとげる直前まで美保基地に所属していた。京大で西洋史を専攻した彼が残したこの手記は、あの戦争の意味を問いかけているようだ。

63　『 ナショナリズムとジェンダー 』

上野千鶴子（ちづこ）　岩波現代文庫

あちこちでケンカを売る、売られたケンカは必ず倍返し。一見したところ、乱暴なキャラクターのようだが、これほど骨太な論理をこれほど大胆に展開する社会学者はかつていなかった。本書は「国民国家」という神話をジェンダーの視点から批判的に読み直そうという試み。かつての社会主義者たちの女性に対する扱いに容赦のない批判を浴びせる。痛快な一書。

64　『 闇の左手 』

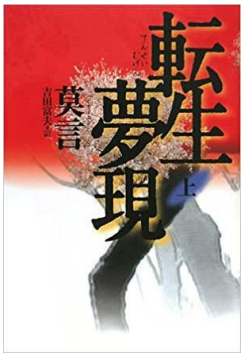
アーシュラ・K・ル=グウィン　小尾芙佐訳　ハヤカワ文庫 SF

ル＝グウィンはアメリカの女性 SF 作家。『ゲド戦記』などのファンタジー作品でも知られる。両性具有の社会という特異な設定は、フェミニズム思想を強く意識したものといえるだろう。文学や社会運動の場でフェミニズムが語られ出したのは、この作品が 1969 年に発表されてから何年も経てからのことだった。ル＝グウィンの先見性を感じさせる代表作。

65　『イシ　北米最後の野生インディアン』
シオドーラ・クローバー　行方昭夫訳　岩波現代文庫

作者はアメリカの文化人類学者。アメリカ合衆国は建国から西部開拓時代を通じて、原住民であるインディアンの生活を奪い、殺戮し、最後には言葉さえ奪おうとした。本書は、この理不尽な虐待から辛うじて生き延びたカリフォルニア・インディアン、ヤヒ族・イシの伝記である。作者の娘に当たるアーシュラ･K･ル＝グィンは、両親のイシに対する深い共感を、本書序文で紹介している。

66　『 転生夢現 』
莫言　吉田富夫訳　中央公論新社



莫言(バク・ゲン)、モオ･イエンの名前が日本で最初に広まったのは、チャン・イーモウ監督の映画『紅い高粱(こうりゃん)』の原作者としてだった。仏教でいう転生が、ラテンアメリカ文学の文体で語られる。繰り返す転生によって、中国現代史を描き出そうとした。転生の中で引き継がれる語り手の中に、G＝マルケスの影響がうかがえる。莫言は2012年、ノーベル文学賞を受賞した。

67　『 武満徹 音楽創造への旅 』
立花隆　　文藝春秋

1996年2月の武満の死後、ＮＨＫの追悼番組に出演した立花隆が、武満の臨終の際の言葉を引用しながら、いきなり号泣してしまったことがあった。見ていて驚いたが、それは少し感動的な光景でもあった。本書は、武満の生前、長時間かけて行われたインタヴューを纏(まと)めたもの。すばらしい評伝となっている。二人の信頼関係の深さを物語るロングインタヴューだ。

68　『 日本的霊性 』
鈴木大拙　　岩波文庫

禅／ZENを世界に知らしめた人が鈴木大拙だったといっても何ら過言ではないだろう。英文での仏教に関する著作も20冊を越え、戦後、アメリカ各地の大学で行った講演では、幅広い層に大きな影響を与えたといわれる。アジア太平洋戦争末期、敗戦の必至(ひっし)を信じて書かれたという本書は、宗教意識の源流をさぐりながら、世界に向けて書かれた新たな日本人論ではなかっただろうか。

69　『 都市空間のなかの文学 』
前田愛　　筑摩書房

‘文学作品は都市論として読まれるべきで、同様に都市論は文学として読まれるべきだ’前田愛は、生涯かけて、文学研究の中に方法論を導入せんとして格闘した。近世文学から、後に近代文学へと研究の比重を移したが、この態度は一貫していた。本書中、淀江町出身の松原岩五郎『最暗黒の東京』に言及している。岩五郎の本を取り上げた数少ない評論集でもある。

70　『 本の気配 書店の棚 』
佐野衛（まもる）　　亜紀書房

読書人を自認する人間で、佐野衛の名前を知らない人間は、己の不明を恥じるべきである。佐野氏は、長らく東京堂書店の店長を務めた。かれの作り出す書架は独特で、決して真似することのできないものだった。多くの小説家からも信頼され、佐野氏の手を通してしか本を買わない作家もいたという。分析哲学についての著作もある、伝説の書店人による本屋さんの話。

71　『 からだ・こころ・生命 』
木村敏　　講談社学術文庫

精神科医として、常に具体的な臨床経験を持ちながら、その経験をここまで理論的に昇華した臨床医はいない。本書の解説を書いた分析哲学者の野家啓一氏は、著者のことを現象学者と呼んでいるが、実に的確な呼称に聞こえる。難解で知られる木村氏の文章だが、本書は講演記録をもとにしたもので、木村敏世界への格好の入門書となっている。

72　『 ポエティカ　Ⅰ 』
吉田健一　　小澤書店

21 世紀になって、この日本に吉田健一のような人が一人もいなくなってしまったことに気づかされる。これは嘆かわしく、ある意味怖ろしいことかもしれない。小澤書店編集による本書には、英国文学に関する文章が纏（まと）められている。学問的というよりも、真の深い教養の形を読者に感じさせる、圧倒される一書だ。吉田健一は吉田茂の長男に当たる。

73　『犠牲(サクリファイス)　わが息子脳死の 11 日』
柳田邦男　　文藝春秋

精神を病んだ結果、自死を選んでしまった次男の遺体と向き合いながら、動揺する著者。それでも“臓器提供”や“脳死問題”について書かずにはおられないノンフィクション作家としての自分。動揺をかくさず、躊躇する思考を隠さないこの手記に、読後こころが洗われるように感じるのは何故だろうか。

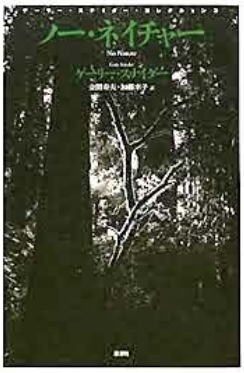
74　『 南方熊楠・萃点の思想 』
鶴見和子　　藤原書店

著者は社会学者。タイトルの萃点とは南方の言葉。モノが集まる地点、という意味らしい。鶴見和子氏は民俗学にも詳しかったが、とりわけ南方熊楠研究を切り開いたことは大きな業績の一つだろう。本書のサブタイトルは「未来のパラダイム転換に向けて」。怪物めいた南方の知性とその魅力を多方面から紹介し、次世代へと繋ごうとする意志を感じさせる好著。

75　『 二十世紀の十大小説 』
篠田一士　　新潮社

篠田は旧制松江高校の出身。日本の文芸評論家にはめずらしく、詩の歴史にも詳しかった。また同時に世界文学の善き紹介者でもあった。いくつもの伝説を生んだ巨体は、常人の何倍もの読書をこなし、何倍もの評論を書き上げた。この十大小説は、20 世紀の文学チャートとしても読めるものだ。島崎藤村『夜明け前』が入っているのがうれしいところ。

76　『ノー・ネイチャー』
ゲイリー・スナイダー　　金関寿夫訳　思潮社



本書は、アメリカの詩人、ゲーリー・スナイダーコレクションの 3 巻に当たる。学者志望のスナイダーが詩人としての道を選択したのは、仏教学者･鈴木大拙の強い影響によるという。彼自身、京都の相国寺で雲水修行の経験を持つ。本書は彼の半世紀にわたる詩人としての全貌を見渡すことのできる代表作品集でもある。巻末の山里勝己氏による解説が実にすばらしい。

77　『 人間の条件 』

ハンナ・アーレント　志水速雄訳　ちくま学芸文庫

アーレントはドイツ系ユダヤ人の思想家、哲学者。ナチズムの時代、最初はフランスに、後にアメリカに亡命し、いくつかの大学で教鞭をとった。1951 年、ナチズムとスターリニズムを総括した『全体主義の起源』を発表して注目された。本書はこの大著の後、労働・仕事・活動、という独特の概念を用いて、現代社会批判を試みたもの。その批判は驚くほど今の時代に届いている。

78　『ぼくの命は言葉とともにある』

福島智　　致知出版社

福島智という人の存在、この人の活動自体によって希望を与えられた人がどれだけいることだろう。著者は幼児期に左右の視力を失い、十代の時に両耳の聴力も失う。「限定のない暗黒の中で呻吟していた」という想像を絶する世界を体験している。著者はコミュニケーションの根源的意味について、盲ろうの立場からの経験を伝えながら、解り易い言葉で語っている。

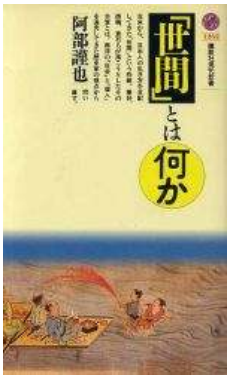
79　『 道化と錫杖 』

ウィリアム・ウィルホード　高山宏訳　晶文社

著者のウィルホードは、ユング派のセラピストを経てワシントン大学の英文･比較文学の教授となった。この経歴は本書の構成に大きく貢献している。中世の文学作品から 20 世紀の映画まで、秩序と混沌の狭間で生きるトリックスターの歴史を描いた傑作。英文学会の異人･高山宏氏の翻訳。巻末の「あとがきにかえて 知性の「夏」の絢爛」はそれだけで一冊分の極めてすぐれた論考である。

80　『「世間」とは何か 』

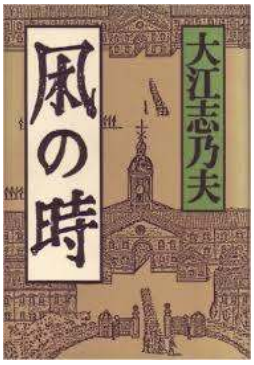
阿部謹也　　講談社現代新書



著者の阿部謹也氏は、ドイツ中世史の専門家。ヨーロッパが専門の舞台なのに、網野善彦ほか、日本の歴史研究者からも随分と信頼された学者だった。およそ著者の専門からはほど遠いと思われる、日本の“世間”についての考察が、大きな反響を呼んだ。自らの研究で磨き上げた方法論によって、自らを縛るこの社会の特異性について論じる。その正鵠な批評はみごとだ。

81　『 凩(こがらし)の時 』

大江志乃夫(しのぶ)　　筑摩書房



著者は日本の近現代史が専門の歴史学者。近代を対象とした研究も多い中で、本書はなぜか小説なのだ。明治末、日本全土を震撼させた「大逆事件」の顛末(てんまつ)を克明に描いている。大岡昇平の史伝体の作品に刺激を受けて構想したという本書は、時代の空気、時代の気分を見事に再現してみせた。研究論文では、とてもこんな風にはいかないだろう。

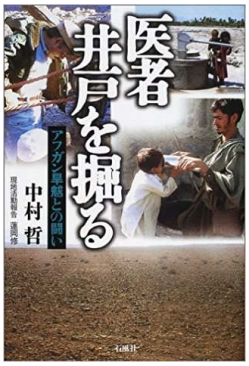
82　『 ミッドナイト・エクスプレス 』

沢木耕太郎　　文藝春秋

年若い自衛隊員、長距離ランナー、テロリスト、プロボクサー。この著者の手にかかると、どんな素材を使っても、見事な青春小説となるから不思議だ。文藝春秋によってまとめられたこのノンフィクションシリーズは、実質的な沢木耕太郎全集である。一世を風靡した『深夜特急』のシリーズはこの第 8 巻に収載された。シリーズには単行本未掲載の作品も多数収載されている。

83　『 医者井戸を掘る 』

中村哲　　石風社



中村哲氏の本業は医者である。しかし井戸も掘るのだ。現地の友人たちを何百人も差配して土木工事を指揮するところは、筋金入りの土建屋のようにも見える。ボソボソと恥じらうように語るこの人の、どこにそんな力があるのだろうか。84 年にパキスタンに入り、86 年以来一貫してアフガンを舞台に活動している。メディアの報道からは決して聞くことの出来ない現場報告がここにある。

84　『 近代日本と仏教 』

末木文美士(すえきふみひこ)　　トランスビュー

末木文美士(すえきふみひこ)氏は、現在最も多数の読者を持つ仏教学者といえるのかもしれない。本書は「近代日本の思想・再考」シリーズ 3 冊の中の 1 冊。ほかに『明治思想家論』『他者・死者たちの近代』がある。「仏教」という新たなキーワードによる近代の読み直しにより、どんな風景が出現するのか。著者が切り開く新たな精神史が期待される。

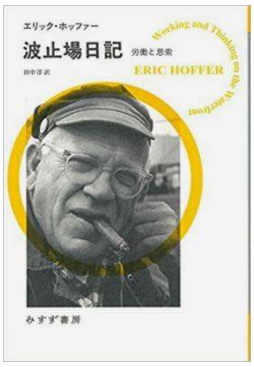
85　『 江戸の歴史家 』

野口武彦　　ちくま学芸文庫

練達の文芸評論家だった野口武彦氏が、気が付くと歴史家に転身。素人目にはそんな風にもみえてしまったが、もともと近世思想史を深く学んだ人であることを考えれば納得できる。しかし次から次へと上梓される本のどれもが面白いというのは尋常ではない。文学でもなく歴史学でもない。野口学と言うべき新たなジャンルの入口を示す記念すべきランドマークが本書である。

86　『 波止場日記 』

エリック・ホッファー　田中淳訳　みすず書房



アメリカの思想には「輸入品」が多い。しかしこんな人もいるのだ。18 歳での父の死から天涯孤独。正規の学校教育は一度も受けなかった。季節労働者として放浪するうちに、図書館で物理学、数学、植物学、ドイツ語を学んだという。偶然の出会いから、一時大学で教えることもあったが、身体が動くうちは沖仲士を続けた。波止場での思索そのものを纏めたものが本書。哲学するとはこういうことだ。

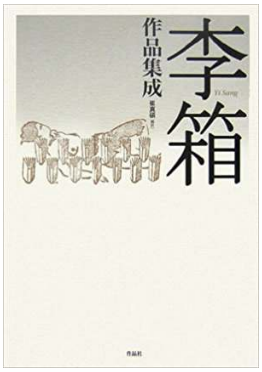
87　『 ミメーシス 』

エーリッヒ・アウエルバッハ　篠田一士訳　筑摩叢書　上下巻

アウエルバッハは旧世代の評論家だが、本書は文字通りの不朽の名作。ミメーシスとは“模倣”を意味する。ヨーロッパ文学三千年の歴史を俯瞰し、かつ描写･文体論の変容の歴史を追跡する著者の考察は実に見事だ。よく出来た長編小説を読むような醍醐味が味わえる。ナチスの迫害を回避しつつ、理想のヨーロッパを夢見ながら書かれたものではないかという説もある。

88　『 李箱作品集成　』

李箱　崔真碩訳　作品社



李箱(ｲ･ｻﾝ)、本名は金海卿(ｷﾑ･ﾍｷﾞｮﾝ)。日本の植民統治時代の朝鮮の詩人。モダニズムの表現グループに属しながらも、同時代の他に類例のないようなシュルレアリスムの作品を多数残した。二つの言語で発表された実験的な作品には、澄んだ青空を映したような作品はない。26 歳で東京に果てた彼の人生さながら、哀しく、謎めいたものが多い。しかしその謎が、今でも強く人を惹きつけるのだ。

89　『ある文人学者の肖像 評伝富士川英郎(ひでお)』
富士川義之　　新書館

1969-1984、中央公論社から「海」という雑誌が出ていた。82 年の新年号から、富士川英郎氏による「訳詩ものがたり」の連載が始まる。その連載の第 1 回が、米子出身の詩人生田春月、第 2 回が春月の師匠の生田長江だった。ドイツ文学の専門というだけではなく、日欧の近代詩の歴史にも通じた連載はすばらしいものだった。本書は英文学者の長男による評伝。父子の、精神の共鳴は感動的だ。

90　『サド復活 』
澁澤龍彦　　小学館 P＋D ﾌﾞｯｸｽ

あの懐かしい澁澤龍彦の復活である。巻末に付けられた「新装版あとがき」(1970)によれば、この本が澁澤にとって最初の評論集であり、上梓(じょうし)されたのは、安保闘争で世情騒然となっていた 1959 年であるという。‘世の中’に住むことを拒否した澁澤らしいエピソードである。あの時代、サドについての考察をここまで深めることが出来た知的膂力(りょりょく)には、感動せずにはいられない。澁澤伝説はここから始まったのだ。

91　『 銀河の道虹の架け橋 』
大林太良(たりょう)　　小学館

著者は日本を代表する民族学者。自然相手の科学者たちは、研究対象をケタ違いに長い時間の中で観察したりするものだが、人文系の学者で、大林氏ほど長い時間を相手に考え抜いた人も稀だろう。その仕事の目的は、世界中の神話に語られている「銀河」と「虹」についての内容を分類整理しようとする途方もない仕事だった。本書は、壮大なスケールを想像可能とする強靭な知性の裏付けを感じさせる。

92　『 収容所から来た遺書 』
辺見じゅん　　文春文庫

アジア太平洋戦争の敗戦後 12 年目にして、隠岐の島出身山本幡男(はたお)氏の遺族の許に遺書が届けられた。それは、旧・ソ連の強制収容所(ﾗｰｹﾞﾘ)で亡くなった山本氏と労苦を共にした仲間たちが、遺書の断片を暗唱して届けるという異例の方法によった。極限的な環境を乗り越えて届けられた遺書の物語。 絶望の中にあって、希望を忘れなかった人々の物語だ。登場人物の一人は米子の人だった。

93　『 第七官界彷徨　瑠璃玉の耳輪 』

尾崎翠　　岩波文庫

永遠のアイドル、という言葉が文学の世界にもあるとしたら、差し詰め尾崎翠はその代表格だろう。1896 年(明治 29)、岩美町生まれ。東京での作家活動はごく短いものだったが、決して古びることのない作品をいくつも残した。どんな方法論でも謎解き出来ないのが「第七官界彷徨」だ。感覚的に書かれているのではなく、独特の方法論による創作と見るべきだろう。近年増々ファンが増えているという。

94　『 戦争を記憶する 』

藤原帰一（きいち）　　講談社現代新書

かつて日本の戦後民主主義を称して“ひ弱な花”と称した人がいたが、そういうひ弱な社会の中からでも、こういう強靭でしなやかな精神も生まれるのだ。藤原氏の論考の際立つ特徴は、イデオロギーの呪縛というものを、軽々と飛び越えてみせるところだ。反戦思想やナショナリズムについて、こうした角度から語る学者はかつていなかったように思う。

95　『 吉本隆明 江藤淳 全対話 』

吉本隆明　江藤淳　　中公文庫

吉本隆明は 60 年代学生運動の神話的カリスマ。一方の江藤淳は、70 年代に入ってからは文芸評論家というよりも保守派強面（こわもて）の論客だった。この二人は、互いの仕事を評価し、影響を受けた関係にある。政治的な立ち位置がこれほどかけ離れているにも関わらず、どうして相互の深い理解が可能だったのか。この大きな謎を、本書が解き明かしてくれるだろう。

96　『 ユートピアだより 』

ウィリアム・モリス　川端康雄訳　晶文社

モリスの名前は知らなくとも、“アーツ・アンド・クラフツ運動”という言葉は聞かれた方も多いと思う。大正･昭和期の青年たちに強く支持された思想家の一人。師にあたるジョン・ラスキンの反近代思想を独自に発展させ、“生活と芸術の一致”を実践しようとしたのがモリスであった。モリスのこの運動は、日本の民芸運動にも影響を与えた。本書からモリス思想のエッセンスを伺うことができる。

97　『 アクセルの城 』

エドマンド・ウィルソン　　土岐恒二訳　　ちくま学芸文庫

E・ウィルソンはアメリカ生まれの文芸評論家。本書は1931年に出版されたが、今なお古びない名著だ。象徴主義文学の衰亡を語りながら、同時にプルーストやジョイスを、またガートルード・スタインを語ることによって、20世紀文学の揺籃期を独特の方法で示した。フィッツジェラルドやナボコフは、彼の紹介によって世に出たという。

98　『 シモーヌ・ヴェイユ選集 Ⅱ』

シモーヌ・ヴェイユ　冨原眞弓訳　みすず書房

数奇な運命の哲学者。ユダヤ系フランス人としてパリに生まれ、エリート教育を受け、20代ではいくつかの学校で教職を体験した。組合活動などを経て、未熟練工として工場で働いたことも。ナチズムを避けてロンドンへ渡りそこで34歳の短い人生を終えた。ヴェイユが有名になったのは戦後、書きためていたノートが刊行されてから。有名な「工場日記」はこのⅡ巻に収載されている。

99　『列島文化再考』

宮田登ほか　ちくま学芸文庫

網野善彦、塚本学、坪井洋文、宮田登。二人の歴史学者と、二人の民俗学者。四名の名前が連なるだけで、学問が熱かった時代の気分が甦るような気がする。四名に共通する点は、学問の壁を壊そうとしたこと。「日本」という名前で呼ばれる地域の歴史と文化の多様性・多元性についての考察を重ねたことだろう。このメンバーによる座談が今読めるのは、奇跡のようでもある。

100　『大衆文学の歴史　上下巻 』

尾崎秀樹　　講談社

日本の近代文学史において、‘大衆文学’という言葉で括られるジャンルは、決して尊敬される地位にはなかった。尾崎氏は、その大衆文学の誕生揺籃期から、成長期、開花期にいたるまで、半ば独力で定義づけ、このジャンルの重要性を説き続けた人である。白井喬二、村雨退二郎、永井路子など、当地に縁のある作家情報も実に正確。ゾルゲ事件の尾崎秀実は異母兄にあたる。